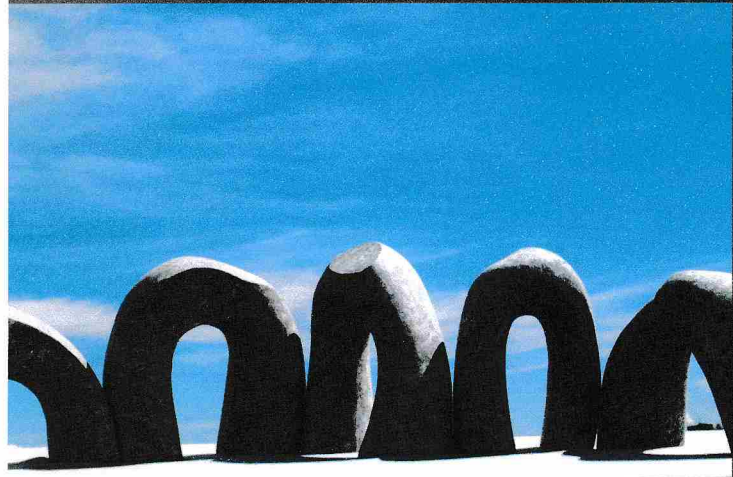
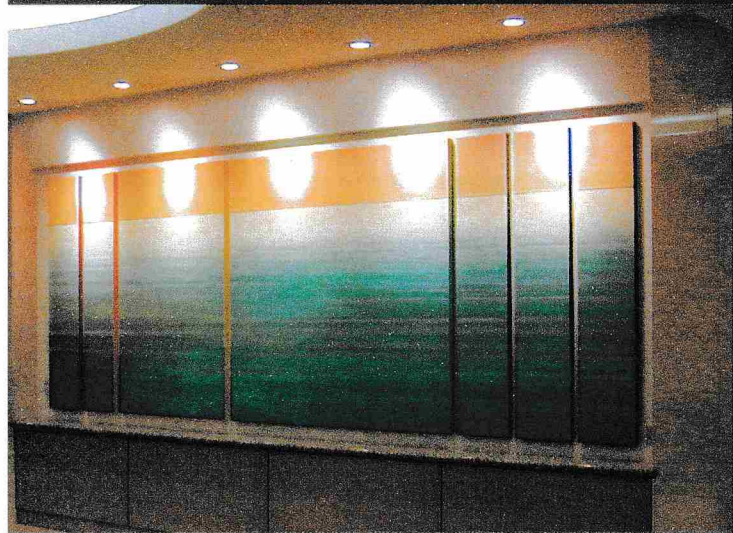


躍動



五つの門



LANDSCAPE '99



NO.30 2000.1

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会

# アピランス



aaca会員  
美術作家  
SADAO KIYATAKE  
**喜屋武 貞男**  
千葉県柏市宿連寺446-21  
TEL.0471-31-3537

「躍動(アルミニウム製)」  
設置場所：柏市東口駅前商店街  
ハウディモールの中心地  
2000mmH×1000mmW×1000mmD

ひらがな文字「かしわ」という平面のものを立体にして形を構成し、着色もした。ゆっくりとまわるようにして夜間照明もしている。ハウディモールの発展と繁栄を祈念して制作した。



aaca会員  
彫刻家  
AKIRA YAMAMOTO  
**山本 明良**  
東京都葛飾区柴又5-31-18  
尚彫刻工房十方舎  
TEL.03-5668-9417

「五つの門」  
設置場所：  
210mmH×900mmW×300mmD

大きな広場、空間を設定にしたマケットです。くぐったり、よりかかったり、かかれたりと、人間の身体感覚を喚起する形態を提案したい。



aaca会員  
環境造形作家  
FUJIKO ABE  
**阿部 富士子**  
東京都港区赤坂7-5-27-701  
尚スペース アーツ  
TEL.03-3505-5761

「LANDSCAPE '99」  
設置場所：A.マンションロビー(港区赤坂)  
1300mmH×3800mmW×35mmD

「心の快適性」と「色彩」のかかわりをテーマに和紙をベースにして制作しています。視線の広がり・リズムを意識して変化する色彩で環境の中に溶け込み、見る人の創造性をかきたてるよう心掛けました。



aaca会員  
彫刻家  
MASARU MIKI  
**三木 勝**  
神奈川県藤沢市南藤沢7-6-504  
TEL.0466-27-2913

「知の歩み(左)、愛と創造の道(右)」  
設置場所：岡山県生涯学習センター(岡山市)  
1750mmH×700mmW×650mmD  
1800mmH×950mmW×750mmD

建物に向かう通路の両脇の芝生の中に、来館する人々を迎えるかのように立つ二体の石像。彫刻を見ながら歩くうちに、勉学への意欲がわき、希望と困難に立ち向かう勇気が出てくればと願い、硬い石を彫り上げました。

## CONTENTS

'99広島aaca景観シンポジウム	1
シンポジウムに参加して	4
aaca見学会	6
aacaトーク	8

### ■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。  
事務局までお問い合わせ下さい。  
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行います  
のでご了承下さい。

発行： 社 日本建築美術工芸協会  
Phone 03-3457-7998  
Fax 03-3457-1598  
〒108-0014  
東京都港区芝5-26-20  
建築会館6F

振替：00110-2-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見 満

副委員長 高部多恵子

富田俊男、北村孝昭、石田真人

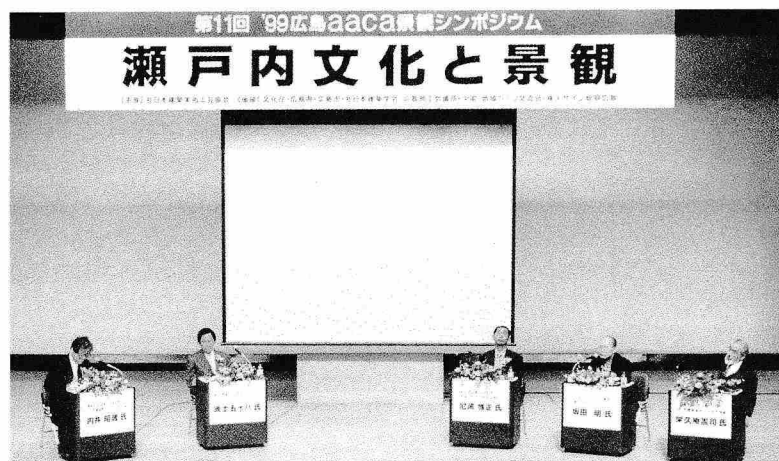
渡部毅志、高塚信吾、山崎輝子

事務局 長 伊藤留雄

制作協力：(株)SP建材エージェンシー

日時：平成11年10月28日(木)  
午後1時15分～5時  
場所：広島県民文化センター

パネルディスカッション  
司会：内井 昭蔵  
パネラー 進士 五十八  
坂田 明  
尼崎 博正  
栄久庵 憲司



## あいさつ



aaca会長  
芦原 義信

### 美しい都市景観考える一助に

本日は、第11回'99広島aaca景観シンポジウムにお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。私ども日本建築美術工芸協会は、建築家や美術家・工芸家が一堂に会して、各種ディスカッションを重ね日本の都市景観を少しでも良くしていこうという団体であります。

その一環として毎年各地でシンポジウムを開催しております。

最初は京都に始まり、次に長野、そして昨年は飛騨高山にて開催してまいりました。

第11回目は広島市で催すことができました。これは、関係者の皆様の大変なご支援のおかげであります。本日のこのシンポジウムを私ども協会といたしまして、誠にうれしく思う次第です。

講師の諸先生は、日頃なかなかお目にかかれぬ方々でご多忙にもかかわらず、ディスカッションして下さいますので、皆様最後までご静聴よろしくお願ひ申し上げます。

終りに際し、このシンポジウムが有意義でありますことを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

## 基調講演



文部省文化財保護部  
文化財監査官  
村上 訊一氏

### 文化立国へ近代化文化遺産を拡充

#### —文化財と周辺景観の一体保存—

近年、文化指向が高まって、文化全体に目が向けられつつあります。それに伴って文化財の範囲も広がってきました。文化庁としても、より幅広い文化行政を展開して参りたいと思います。

とくに、これまでの少数で硬いイメージから、多数で柔軟な保存へ転換していく、そしてその文化財の活用を図っていく視点を大切にしていかなければなりません。それによって国民が文化財に親しむ機会が多くなり、保存と調和のとれたまちづくりも進んでいくのではないのでしょうか。

こうした時代の変化に対応して、文化庁は文化行政を改善充実し、施策を展開しているところです。

その一例をあげますと、まず第一に文化財保護の裾野・分野の拡大があります。人々の暮らしの中にあつた生活文化、あるいは近代化を支えた文化遺産が失われつつあります。これらをどう保存していくかが大きなテーマです。

とくに近代化遺産は、所有者が利用しているものが多く、文化財の指定を受けると釘一本打てないというような誤解もあったためか、どんどん失われてきました。

ようやく近代化遺産が重要文化財に指定されましたが、今後さらに拡大していくことが必要と考えます。

その一環で1996年文化財保護法を改

正し、登録制度を導入しました。

たとえば建築物の外観については届け出制をとり、内部は所有者の自由にするというように、重要文化財よりは緩やかな規制になっております。これによって所有者が自ら残す意識が高まるのではないかと期待しております。

3年が経過し、登録された文化財は1500件を越えました。

第二は総合的・一体的な保存です。

これまで個々の文化財を一つずつ保存していた側面がありましたが、これを関連する文化財も含めて総合的・一体的に保存していこうというものです。たとえば建物と建物資料や家具、あるいはまちなみ保存をする際に、祭りや一体となっているような場合は一緒に残していこうというような発想です。

第三は周辺の景観・環境との一体的な保存です。

この点については、ユネスコの世界遺産の考え方に学ぶ所が大だと思ひます。これは世界的に価値がある文化・自然遺産を総合的に保存というもので、日本からは法隆寺や厳島神社が指定されています。登録されますと、単体としての保護や周辺にバッファゾーンと呼ばれる緩衝地をつくるようになっており、これによって単体と周辺景観が一体となった保存がされることになります。

ものを広くとらえて保存していこうというのが文化行政の今後のスタンスです。しかも文化遺産は使えるということも大切で、近代化遺産の場合、新しい機能にするという改造も止むを得ないと考えます。しかしながら一方で、きちっと保存すべき物は保存するというのも大切です。

こうした考えに沿って、文化立国をキャッチフレーズに施策を展開して参りたいと思ひます。

## パネルディスカッション



建築家/aaca副会長  
内井 昭蔵氏

### 歴史と文化、語りあいましょうか

瀬戸内は、気候温暖、安全な内海として多くの文化を生み出してきました。

早くから大陸と畿内を結ぶ主要な交通路として栄え、大陸からの多くの文物とともに情報のルートでもありました。

したがって、瀬戸内は中央政治の動向に影響を与え、歴史的にも多く登場してきました。

源平の盛衰は厳島神社が象徴しており、その風景はわが国の多くの心の中に焼きついています。

白浜青松の美しい風景は、万葉の時代から多くの詩歌に詠まれ文学作品の舞台にもなっております。しかしながら、最近では沿岸の工業化も進み一大工業地帯を形成し、その風景は大きく変わっております。また、本年5月には、「瀬戸内しまなみ海道」が開通し、中国・四国地方にまたがる新しい広域経済文化交流圏の形成が期待されております。

そこで今回のシンポジウムでは、新しい時代に向けて瀬戸内海が生み出してきた文化と景観と今後の展望などについて語り合いたいと考えております。



東京農業大学学長  
進士 五十八氏

### 「らしさ」は長い間に培って感じる石の文化

瀬戸内ときいて連想するのは、池がありその中に島があるという古い日本庭園です。日本人の祖先たちは、おそらく瀬戸内海を通して大和にいったと思うのですが、そこでみた瀬戸内の光景を日本庭園に生かしたのではないのでしょうか。

近代に入ると、昭和6年に国立公園法ができて、第1回の指定を瀬戸内海が受けました。このほかにも雲仙・天草などがありますが、すべて海が関わっているものです。日本三景の一つである宮島に

も海の風景です。古い時代は船が交通の中心ですから当然ではあるのですが、その中でも瀬戸内は代表的な海の景観として日本人の心にあるのだと思います。

もう一つ瀬戸内で思い浮かぶのは、白浜青松という言葉です。白浜とはみかげ石の砂であり、そして海岸に植生する松である青松がある。まさに瀬戸内を詠んだものだと思います。

白い砂にはやはり緑の松がよく似合いますし、それを生む地質や植生と同時に、地形も大切な要素です。日本庭園の池の周りに松が植えられているのも、海をイメージしているからでしょう。

景観の議論は、この10年ほどで急速に盛り上がってきました。私は景観というのは、一つは「らしさ」だと考えます。水辺には水辺の風景があり植生があるように、長い間に培って感じるものがある。それが文化だと思います。瀬戸内の景観は、みかげ石の粉と地形、そして石の文化ですね。

地方分権の時代といわれますが、その地方の時代のまちづくりの在り方を考えると、地域の個性をなくすようなまちづくりをしているような印象があります。たとえばその土地の石などを材料に使えばいいと思うのですが、使っているのは残念ながら工業製品というような具合です。その土地にはその土地がもっている風景があり、それをつくりあげていくことが必要ではないでしょうか。

そして大切なのは、景観をつくる姿勢です。

中国に西湖堤というのがあります。湖の真ん中に堤をつくる。そしてそこに柳を植えて途中にアーチ橋をつくっています。その周囲には西湖十景と呼ばれる景観が創出されています。

でも強調したいのは、この景観はもともと洪水対策という公共事業から始まり、そこに景観をつかった、すなわち修景したものであります。風景をつくるというのは、頭の体操というか文化的遊戯ではありません。味わうだけではなくそのつくり方を大切にしたい。

翻って日本の公共事業をみると、西湖十景のつくり方と同じ発想で実施されているかは疑問です。公園は公園、洪水対策は洪水対策というように別々にやるのではなく一体的に展開していくことも大切です。

そのためにも土木、建築、造園の専門家が協力しながら進めていくような手法が必要です。そうやって必然性のある景観をつくっていただきたいと思います。



サクソ・クラリネット  
奏者  
坂田 明氏

### 歌えばいい。川や海と接点もって自然に

私はミュージシャンであり、造園家でも建築家でもないの専門的なことはよくわかりません。ここでは音楽をやる立場から、景観について話してみたいと思っています。

最近になって、つくづく音楽とは景観だと実感するようになりました。人が住んでいる所には風景があるように、音楽とは人間が営んでいる文化行為の一つだと思います。世界それぞれの人たちが、それぞれの風景の中で生活している。そこにも音楽があります。

私は呉の小さな港町で生まれました。前は浜、後は山というような所で、そんな環境というか風景の中で育ちました。子供の頃は、母が「晩飯はなんにする」と聞けば、「あさり」と私が答える。すると「じゃあ、掘ってこい」となり、ちゃんとあさがり食卓に並ぶというような暮らしです。

最近『海』というCDを制作しました。とても懐かしい気持ちになっております。音楽と人間が持っている重要なものに、言語があります。これはたいへんおもしろい。

新幹線に乗ったときにびっくりしたのですが、関西弁の車掌さんの社内放送は、まさに音楽でした。これが東京弁だとおそらく棒読みになるでしょう。関西弁は音楽になっているように、それこそ北から南まで地方色があると思います。民謡がそうです。

言語、姿、かたち、さまざまな特性は、民族の主体性をつくる属性だと私は考えます。ではこれらがどうやってできるのか、私はその土地の風景から生まれるのではと考えております。

すなわち、それぞれ違う風景の中で暮らすことが固有の文化をつくる重要なファクターになっているわけです。

文化とつくる土壌には、いま指摘した地域の風景と人間社会がもっている精神的土壌の二つがあると思います。

そして風景の中から音楽が生まれ、それがまた風景の中に溶け込む。風景を愛するような音楽が生まれる。これらは金儲けではない、生活のための生活の一部としての音楽です。

風景には人が手を入れていないものと人間が手を加えて改造した風景の二種類がありますが、改造は経済行為であり工業の視点で改造しているのが実情ではないでしょうか。川をコンクリートの護岸で固めたような見にくい光景がいっぱいあります。

改造する人間が、どんな哲学と倫理感をもってやっているのか、これが問われていると思います。

川だけでなく海をみると、コンクリートのテトラポットで埋め尽くされている光景にぶつかります。確かに台風から守るには有効ですが、海に降りることはできなくなりました。海と人間の生活の場を失ったこととなります。だから海にあるのにプールで泳ぐといった不思議なことになってしまうのです。

歌はその人が歌いたいように歌えばいい。ごく自然に川や海と接点をもてるような、そんな風景がわれわれがめざす風景ではないでしょうか。



京都芸術短期大学学長  
京都造形芸術大学副学長  
尼崎 博正氏

### 風土に根ざしているか、検証を

造園家として、海に対してなにか心に響くものを感じます。それはなにかと考えると、日本庭園は海の風景、しかも温和な自然を理想として表現しているということがあると思います。もともとわれわれは長い間、船が交通手段でした。瀬戸内の景観が評価されているのは、船で移動し船から動く(移り変わる)景観を楽しんだ経験からで、それが日本庭園にもつながっているのでしょう。

たとえば毛越寺(岩手県)の庭園をみると、玉石は白砂をイメージしたもので、その側には松、その手前には岩を組んで島を表現していました。このように、造

園手法として象徴化され洗練されていったわけです。そして、自然の景色や人との関わりを受け入れる。結果として日本庭園はそれが一つの文化を形成していったのだと考えます。自然を表現しながら、人の営みを表現する。それによって自然そのものを庭園化していく手法です。

瀬戸内の景観にしても、そこから醸成された文化にしても、固有性に根ざしているのではないのでしょうか。それが文化というものだと思います。その固有性の中に息づく普遍性を庭園はとらえていったのではないのでしょうか。

別の視点でみると、瀬戸内の地質すなわち花崗岩の文化がさまざまな展開をしていきました。石という重い材料、そしてそれを運ぶ船という流通手段。これが瀬戸内を重要なものにしたと考えます。

京都の庭園文化は、瀬戸内の石と海運が支えたということができません。明治時代になると、石材は京都だけでなく東京へも運ばれ、国会議事堂の外装に使われるというようにさまざまなところで使われました。

なのに肝心の瀬戸内はどうかというと、護岸の石は他の場所で採れたものを使っているというように、「なにかまちがっている」と思わずにはいられません。

風土に根ざした文化的な景観として、これらがふさわしいのかどうか。こうした点を検証していくと、文化を考える重要な視点になると思います。

芸術文化立国をめざす。そんな視点が21世紀を考える重要なキーワードになるのではないのでしょうか。



インダストリアルデザイナー  
日本建築美術工芸協会理事  
栄久庵 憲司氏

### 心にしみわたる迎賓都市へ再構築

小学校の頃の国語の教科書に風景論を思わせるようなものがありました。墨絵のようなその風景が、日本というかふるさとの景観という感じがしました。自分の人生に大きな影響を与えてくれたと思います。日本は美しい国なんだと実感しました。

私にとっての景観とは、瀬戸内の暖かさ、やさしさ、いとおさが一方にあっ

て、もう一方に富士山の雄大さというような二つの軸で構成されています。

実家が広島にあったので、終戦後、放心状態のまま逃げるように鞆の浦を訪ねた記憶があります。その時の鞆の浦を始め瀬戸内の風景は、まるで傷心の人間をやさしく包み込み、悲しいまでに美しいというか、慈悲に満ちたものでした。瀬戸内の風景が放心状態にあった私を暖かく見守り、そして救ってくれたのです。心にしみわたるような風景でした。

ところが最近、久しぶりに訪ねて壮絶に醜くなっているのにびっくりしました。醜さは海にも影響していました。おそらくその要因は住み方の問題だと思えます。そこに住みたいのであれば、どうすればいいかを考えるべきです。

鞆の浦というのは迎賓の文化をもった場所です。心配りというか、人を喜ばす心、人が喜ぶのを見て自分も喜ぶ。そんな迎賓の精神をもった所だと思います。そこで、迎賓都市として再構築してはどうだろうかと提案しました。

美しい瀬戸内を取り戻したい。そのためにも迎賓都市というのは役立つと思います。もちろん、瀬戸内すべてがそうではないと思いますが…。迎賓の海・瀬戸内を超えて、日本全体がマナー文化をもたなければならぬとも思えます。

代表的なものでは茶道です。人が退屈しないセンスをもつということは、お客を退屈させない、ひいては喜んでもらえるということです。それによって信頼が生まれます。要するに人と人のバリアを取りのぞく効果があるのです。

瀬戸内しまなみ海道が開通しました。瀬戸内すべてに共通するわけではありませんが、迎賓という発想は瀬戸内の景観を考えるうえで一つの視点になると思います。

美しい風景は、やはり後世に残していかなければなりません。その美しい風景を核に、新たなものを調和させながら、まちづくりを進めていく。一見すると矛盾するように感じるかもしれませんが、その一見矛盾することを、どう調和させるかが課題です。

# 第11回 '99 広島景観シンポジウムに参加して



広島市都市計画局都市デザイン室 室長補佐  
TOMOHIRO MOHRI  
**毛利 知博**  
広島市中区国康寺町1-6-34  
TEL082-504-2277

「瀬戸内文化と景観」をテーマとした「第11回 '99広島aaca景観シンポジウム」が10月28日、日本建築美術工芸協会の主催で広島市で開催されました。本市といたしましては、シンポジウム開催への後援並びにお手伝いをさせていただきましたことをたいへん喜ばしく思っております次第であります。

振り返ってみますと、昨年11月協会の栄久庵理事が本市へ来られまして、シンポジウムの広島開催のお話をされたのが始まりでございます。しかし、具体的な日程、場所について協議を始めたのが今年の5月になってしまい、その間市長の交代等もあって市としても日々の用務に追われる毎日の中で本当に開催できるのか不安でありました。

特に9月と10月の広島は毎週のように学会等の全国大会が開催される予定になっており、会場や宿泊先が容易に確保できない状況でしたので、毎月のように広島へお越しいただき打ち合わせをさせていただいた伊藤事務局長様のご心労はたいへんなものであったとお察しします。

今回のシンポジウム開催に関わらせていただいた感想を申し上げたいと思います。

1つは、今回のシンポジウム開催について、主催は日本建築美術工芸協会として、地元の自治体は後援することとし、事務局は民間団体の中国・地域づくり交流会が行ったことが特徴としてあげられると思います。

市民のまちづくりへの関心の高まり、さまざまな分野で市民グループが実力をつけてきたことにもなって、行政主導で行われてきた都市景観の問題も市民主導へと移り変わりつつあります。本市においても、今回のようなシンポジウムを実施できる民間団体が育ってきています。中国・地域づくり交流会もそのような団体の1つであり、今後、ますますの活躍が期待されています。

2つ目には、シンポジウムの内容について、地元の意見がもう少し反映できればと思いました。

今回の場合も、「瀬戸内文化と景観」という大きなテーマは決められておりまし

た。このテーマなら今年5月の「瀬戸内しまなみ海道」開通にともなって、広島県尾道市で開催するとか、広島県と愛媛県の両県を結ぶシンポジウムとして瀬戸田町で開催するのもおもしろいと考えました。また、地元からもパネリストに参加させていただけると、より具体的な事例等もご紹介できたのではないかと思います。

景観に関する業務に携わっている者として、都市の景観とはその都市の歴史と文化を映し出す鏡のようなもので、一朝一夕にできるものではないと感じております。その意味から、今回のシンポジウムから多くの有意義なことを学ばせていただきたいと感謝申し上げる次第であります。

最後になりましたが、前回開催の高山市から適切なご教示をいただきましたことに感謝いたしますとともに、日本建築美術工芸協会のますますのご発展と今後のシンポジウムのご成功をお祈りいたします。



aaca調査研究委員  
アートアソシエイツ 八咫 主宰  
NORIKO TSUYUGUCHI  
**露口 典子**  
東京都千代田区九段南2-2-8-410  
TEL03-5213-5453

『…夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きし今朝見れば松風ばかりや残らん…』謡曲「松風」の大詰の舞台は須磨の浦。囃子や地謡にのって、松をわたる潮風や波飛沫がシテの心情表現を高めます。

この須磨の海岸近く、昨年、対岸の淡路島へと大きな橋が架かりました。世界一の吊り橋といわれる明石海峡大橋です。橋がほぼ形を現し始めた頃、海の向こうに見慣れた淡路島の山肌がいつの間にか無残にえぐり取られているのに気がつきました。見る見る内に高速道路のサービ

スエリアが出来、それまで真っ暗だった対岸は夜も煌々とした照明に浮かび上がるようになりました。開通した橋は夜ともなれば七色に変化するライトアップが始まります。橋が見える海沿いにはホテルや飲食店が次々と建ち、毎日のように大型観光バスが橋を渡っていきます。

いつの時代にも人の心は変わらないとはいえ、松風の風情を後生は感じることが出来るのでしょうか。文化庁の村上文化財監査官による基調講演を伺いながらこの様なことを考えていました。文化

行政の施策が、時代の変化に対応して、単体の建造物保存から周辺環境までも含む一体的保存の方向へと変化していること。そして、文化立国を目指して、信仰や文学・絵画などの芸術活動に関するものまでも含めた、文化的景観という視点からの保存も今後の課題になっていくとのことを伺い心を強くしました。

しかし、保存の施策がこの様に展開されようとしている今、風景をつくる側の意識はまだそこまでには至っていないように思えます。文化立国と胸を張れるよ

うな企共事業のあり方はどのようなものなんでしょうか。進士先生が紹介された中国西湖十景の例は、洪水対策という必然から生まれた美で、理想的な公共事業の姿のひとつと受け取りました。風景は着慣れた洋服のようなもので、色々なものが溶け込んでいるから心地よく感じる。一生住み続けられる風景をつくっていかねければいけないとのお話は深く同意するものでした。その根底には栄久庵先生の指摘されたように、先ずは美意識をもつこと、そしてそれを創造行為に移し

ていく必要があり、周辺環境と一体となる風景をつくるには、尼崎先生の言われるように、その美意識を広く共有することが重要かと思われま

す。パネリストの皆さまのお話しはどれも考えさせられるものばかりでしたが、取分けミュージシャンの坂田先生が「音楽は風景です」と言い切られたのは印象的で、アートに携わる者としては羨ましく感じました。風景に一番大切な魂の部分を担うのはアートのはずなのに、「アートは風景です」と言い切れない現実があり

ます。風景の重要さが説かれ、風景づくりに参加を要請される分野は土木、建築、造園と広がっていますが、残念ながらアートは置き去りにされています。参加しても、アーティストが本来の役割を果たしていないことがほとんどです。aacaはこの時代に相応しい、分野を越えたユニークな協会です。その一員として、本当の意味での文化立国を目指すため、風景をつくる際に話題にのぼってこないアートの役割を今一度考えてみたいと思いながら帰途につきました。



aaca事業委員  
東陶機器㈱ 常務取締役  
TADAO YOSHIMURA  
**吉村 忠雄**  
東京都港区虎ノ門1-1-28  
TEL03-3595-9570

冒頭より脱線して申し訳ないのですが、最近大変驚かされたことがあります。残暑も厳しい9月中旬に某社の企画で琵琶湖の船からの投網釣りに出かけました。琵琶湖でも由緒ある船宿『臨湖庵』から琵琶湖に船を浮かべ、船頭が投網を掛け、とった魚を天ぷらにして食べるというのが趣向でした。仲居さんから「沢山取ってきて下さい」という声援に送られ、琵琶湖の中央まで10分程の船旅でした。

一回目の投網が行われ、船板に40匹程の小魚が銀鱗を光らせてあがってきました。大きさは15cm程度なのですが、あまり見かけたことの無い色・形で、川魚特有の顔に優しさがなく、一瞬顔つきの鋭さから海にいる魚「イシモチ」ではないかと思う程でした。船頭に、「この魚は何ですか」と聞いたところブルーギルとのことで、色の青いのがブルーギル、黒いのがブラックバスであることが判りました。漁場をかえること5回ほどで投網は10回位掛けられ、実に400匹程の魚があげられましたが、日本古来の鮒や鯉、鰻は一匹もかからずじまいでした。船の上での天ぷらは他の所でとって来た

ハゼや海老でした。

先般見た新聞では皇居のお堀にもブラックバスが多量に増え駆除せざるを得ないとの記事がありましたが、自分の目でこの事実を認識すると、今更ながら日本の生態系が変わってきていることに驚かされると同時に、本当にこれで良いのかという心配をせざるを得ませんでした。

今回の広島での11回目のシンポジウムに参加し、改めて強く感じたことですが、景観や生態系というものは、日本古来の良さを守り抜いて行くところに伝統のようなものが生まれてくるのではないかと思います。私たちの年齢では、山や海の景色の素晴らしさを知っておりますが、これからの子供たちはマンションの谷間から見る日の出や夕焼けしか知らず、また、湖にいる魚はブルーギルでありブラックバスであるというのが当たり前と思ってしまうのではないかと思います。言うまでもありませんが、この事は、子供たちに責任がある訳でなく、劣悪な環境をつくった我々大人が咎を問われるべきだと思います。これからますます環境と建築、環境と自然がどう共生するかということが問

われる時代と考えております。自然を全く破壊しない建築物は過去にも又将来にもあり得ないと思います。社会が便利になれば必ず一方で自然が押しやられているのではないかと思います。こう考えると難しい選択論が出てくる訳ですが、私はこの点について各自が自分なりの判断基準を持つことが大切なのではないかと考えております。たまたま会社経営の末席にいる関係で、私の判断基準は経営同様残す物と切り捨てる物をはっきりさせる事だと考えています。本物だけを子供達に残すことが肝要なのではないでしょうか。

景観シンポジウムには毎年参加させて頂いておりますが、毎回のパネリストのお話しも素晴らしく、参加者も年々増加し、熱心にディスカッションしている姿も真摯で、このようなことが日本全体に広がり一人ひとりが景観を大切にしようとする日本になればと思っております。

ますますのAACCAのご発展をお祈りしております。



日時：平成11年8月27日(金)

午後1時30分～4時30分

場所：「品川インターシティ 大林組東京本社ビル内アートワーク」

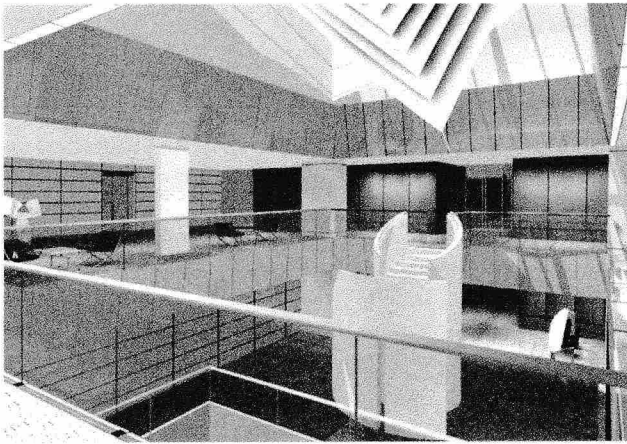
東京都港区港南2-15-2 品川インターシティB棟

(午後2時～3時)

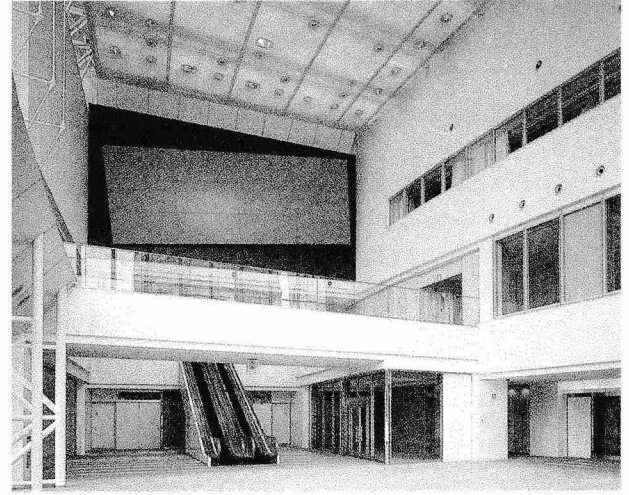
「有明パークビル内アートワーク」

東京都江東区有明3-1-28

(午後3時30分～4時30分)



大林組 東京本社ビル内アートリウム



有明パークビル内アートリウム



aaca会員  
彫刻家  
㈱イーアンドエム 代表取締役  
AKIRA KAWAHARA  
**川原 昭**  
千葉県市川市大和田4-16-3  
TEL047-377-3031

盛夏、真夏の日差しの暑い午後、多数の会員の皆様に参加され、建築とアートに対する関心の深さを知る事が出来ました。

まず、日本を代表する、大手ゼネコン(株)大林組の新社屋、品川インターシティB棟を見学しました。超高層のなかに、価値を創造する、「街」がある。情報の交流する、「広場」がある。アートと触れ合う、「空間」がある。21世紀が鼓動しはじめている。と云う物々しいキャッチフレーズに表現される、この真新しい建築空間はコンコースから既に、私達を情報の虜にしている様でした。長いエスカレーターを昇り切ると、世界の著名なアーティストの作品がさり気なく設置されており、又、各フロアにもインテリアの一部としか思えないような気の配り方で、アートが配置されています。企画の計算を見せないディレクターの配慮は、アートに対する深い思い入れと意気込みを感じました。

建築とアートの融合を目指す当協会の会員として、一番関心の深い所でもあり、

評価としては、それぞれ、価値観や立場の違いが有るにもかかわらず、概ね、良好の表情でした。免振装置が施された巨匠の石彫、床に描かれたグラフィカルな模様、ガラスに融け込んだ造形、階段の機能をもつ彫刻など、様々なかたちでのアート、その勢いに圧倒されました。海外作品が意外と多く、グローバルスタンダードと云われて久しい今日、江戸湾の向こうで活躍する日本人アーティストの姿がなにかしら薄ぼんやりと霞んで見えます。公共性の強い建築空間に負わされた、社会的責任を共有出来る程の優れたアートが、今後もっと多く創られる事を願って、次の会場に移動しました。

全員バスにて、今をトキメクお台場を通り、有明ワシントンホテルに到着しました。当協会、会員の佐野吉彦氏が代表を務める(株)安井建築設計事務所の設計で、設計を担当された方より、設計意図、アートとの関わり等について説明がありました。

曲面で構成されるこのシンプルな建築は、アート作品とあいまって、素晴らし

い造形美を創っています。ペア・アーノルディ氏の大胆でシンプルな作品は、この空間におけるコラボレーションの成功例の一つとして考えて良いでしょう。一方併設されている、商業空間のアートも、それぞれ細かい配慮の上で行なわれており、商業の本質を熟知したディレクターの仕業と思われまます。1階ピヤホール全壁面を使った壁画は豊かな麦の穂を表現しており、響きわたる芳香は、ビール一味を一層美味しいものにすることでしょう。又、上層階の、各レストランも、インテリアデザインにマッチした、さりげない置物から絵に至るまで、高質なものでした。未来都市、有明という立地にある、素晴らしいホテル建築です。

引き続き、同ホテルの宴会場にて、懇親会があり、和やかななかにも、忌憚のない意見の交歓があり、会員間の交流も一層深められ、有意義な会になりました。この様な会を、企画、実行されたご担当の方々に、感謝するとともに、次回の見学会も期待しております。





aaca会員  
株式会社インプレス代表取締役  
NOBUYOSHI INABA  
**稲葉 巨快**  
東京都中央区日本橋茅場町2-13-8  
第一大倉ビル  
TEL03-3668-5977

東京の新都市軸となる品川駅東口地区再開発の先鞭をつけて完成した「品川インターシティー（A棟～C棟）」は、創造と交流の街を目指す総合プロジェクトを立ち上げて建造されました。

地上31階建てのB棟は、(株)大林組の本社業務が開始されています。その(株)大林組のご好意による見学会に参加し、はなはだ私的な感想の一端をご報告のかたちでまとめました。

時代の変化を反映し、(株)大林組東京本社アートプロジェクトは、アートと建築のドッキングを目標に「建築空間と融合するコンテンポラリーアート」の作品決定作業を進められたそうです。

設計チームとアートコンサルタントが選定した作家は、国際性・独自性、現代性、持続性を兼ね備えた国内外の18名に渡り、各作品は〈新たな空間の創造〉におおむね成功しているようです。

なかでも本社の玄関とも言える3Fロビーは、作家が「色とは風景」だと解説する題名「収集された風景」のオブジェが置かれ、これは確実にロビーの空気をやさしく静かに色づけしています。ここにたたく私に心地よい場を提供してくれました。


同フロアの反対側には、可動式パーテーションの役割を備え、フロート硝子にエッチング仕上げの「無限の網」と名付けた作品が据えられています。この大きな硝子は、自然光をさえぎらずにやわらげ好感度の高い空間を創りあげ、建築と融合し機能性においても完成されています。18F～28Fアトリウムの作品は、単純な線・面・色彩使いで11階分にも及ぶ吹抜けスペースの壁面を垂直に貫き、照明具機能を持たせ、さらに南北面をそれぞれ暖色・寒色の色違い表現にしたことで、外の見えない人工的な閉鎖空間の方向感覚を助ける役目もしていました。この作品は、建築の空間構造に同化しながら独自に存在する作品です。

これらは設計構想と一致し、美しさに見える喜びがゆきわたり、抜群の成績を

納めたと評価します。

本アートプロジェクトの提案は、大部分で成功している印象の一方、いくつかの箇所は、作家作品のみが一人歩きた、いわゆる「アートのスポット効果」に終止していると感じました。これでは、建築空間とコンテンポラリーアートの融合が不適切であろうとの危惧を抱きました。このような現象は、この事例に限ったことではなく、他にもしばしば見受けられます。たずさわるスタッフ諸氏の更なる能力を期待したいと思います、自分への戒めも込めて。

次に、(株)安井建築設計事務所ご案内のゆやかにカーブした「パークビル・有明ワシントンホテル」に移動見学。ここでは臨海都市特有の諸条件を克服し、制震壁構造方式・インバーター制御設備等の採用と共に、上階から見えるレインボーブリッジや都心部のスカイラインの眺望は、演出効果も備えた現代の借景で、アートを越えていたようです。

今回の見学会も多数の参加者があり、それぞれに収穫を得られたことと思ひ有意義な企画でした。 



aaca会員  
株式会社 コトブキ タウンアート事業部  
ATSUKO NISHIWAKI  
**西脇 充子**  
東京都港区浜松町1-14-5  
D.Iセンター  
TEL03-3434-3042


日本が経済大国となり、私たち日本人は、物理的な満足を獲得してきました。そして、我々は真の豊かさを求めての模索段階にいるといえます。そんな中、日本の経済をになってきた、建設会社の中でもトップクラスの大林組が21世紀を見据え、次世代の創造性とは何かをテーマに、東京本社ビルを完成させた事は注目すべき事だと思ひます。この企業が掲げる「地球とともに」に表れる環境問題への配慮、それぞれのオフィス機能のコミュニケーションから生じる、クリエイティビティ。その中で、それがいかに先を見越した創造活動であるかをアートが雄弁に語っています。

ここでのコーポレートアートは、日本従来の企業コレクションを配置する手法とは大きく異なり、すべてこのプロジェクトの為にオリジナル作品であり、空間

のプロポーションと機能、作家性と表現そして、建築空間に整合する素材を重要視し、サイトスペシフィックなアートを実現しています。また、アートの展開手法も、絵画、壁画、空間的なインсталレーションから、機能を持ったカウンターから衝立など、多岐にわたり様々な手法を見せてくれます。その結果、アートと空間が整合し建築意匠だけでは表し得なかった、空間における意志や力強さが感じられます。パブリックアートのコーディネートを手がける私にとって、特に感心致したのは、アーティストにすべてを任せていない点です。担当のご設計者とアートディレクターがアーティストのイメージを膨らませ建築素材、例えば、ガラス、ライトボックスなどに置き換えています。アーティストと設計者の相互理解の元、計画実現されたことが感じられ、建設会社ならではの工夫が随所に見られます。また、このコラボレーションは設計者はもとより、特にアーティストにとって発見があったのではないかと思ひます。それは、出来上がった作品が、

作家のイメージ以上に空間に対し明確になったという体験をしたであろうと予想されるからです。ただ、若干機能的になりすぎアートとしてのパワーが半減した作品も見受けられ、機能とアートをどう整合させるか今後の課題となると思ひました。

また、一方、来客に対してのエントランスや、ビップスペースのみならず、通常の業務を行うオフィス空間、休憩コーナー、食堂にもふんだんにアートを施しており、企業精神を外部にアピールすると共に、日常の中でも、社員に対し心地よい空間を提供し、創造的な意識を常に刺激しています。これは、知らず知らず社員を啓蒙し、将来的に意識を高める結果となるでしょう。

このコーポレートアートは今後、日本のオフィスビルの先駆者的な存在となり、これを機にもっと多様なコーポレートアートが他の企業においても出現し、各企業が一歩進んだ創造活動をするきっかけとなることを希望します。 



書家  
 亀甲会主宰  
 KOHO KATO  
**加藤 光峰**  
 東京都大田区山王1-30-24  
 山王ニュートピア301  
 TEL.03-5709-0317

## 古典と歴史

私は小学校就学の前より世間で言う習字のお稽古に通い続けておりました。戦後の落ちつきが生活に見え始めるまで二三年ブランクはありましたが再び筆を執り、文字の字形と変遷に興味を抱く年頃になったのです。高校生になり単に筆に墨をつけて楷書・行書・かな等を書き込むだけではなく、いろいろな「書」の周辺に気ずき、また疑問が湧いて来たのです。それはなにかと言うと広い意味で現存するよい書と言われている書の多様性とそれらの書のもつ背景が気になり始めたのです。他の芸術分野にも当てはまりますが、人間の残した「古典と歴史」に気がついたのかも知れません。このあたりが書芸術にのめり込む最初の転換期だったと思います。そしてまた高校一・二年の頃当時の書道家と自認する幾人かの作家たちに遭遇するチャンスに恵まれました。迷うことはありません私も書の芸術家になるのだと、ひそかに心に決めたものでした。

## 時代を超えた文字群との邂逅

さて十八歳で上京し、貪るように書の

古典の臨書に明け暮れ、一方では何故このように膨大な資料が残されているのか、何故現代人である私に大昔の文字群が語りかけてくるのか（書かれている文章内容の告発とは又別に）。文字または書は言葉や意思の伝達・保存だけでは満足し切れないような機能が最初から付加されて生まれたのではないか、ある種の感動を伴った不可思議な興味となって私の思考を攪乱し始めたのでした。

時空を超えて人間が書き（刻み）残せずにはいらなかった彼等の行為と思惟の結晶体（今の言葉を使うと「人」の染色体・DNAのようなもの）ではないのか。さすれば造形面での工夫と展開、加えて表現技法の探求もまた怠ってはなりません。更に現代の芸術家になるには今までの単なる師匠からの免許皆伝ではなく、真に私の作風がオリジナルであることが必須なのです。専門ジャンルを設定し、かつ作家としてのポリシーを確立した上での「時空を超越した生命が宿る線」の表出なのです。

## 古代文字に魅せられ、憑かれ、生かされて

やはり私には書史に残る書体のなかで

は中国古代文字と一括される（シニュー・甲骨文字・金文＝殷・周時代）あたりにモチーフとしてのターゲットを絞り込んだのです。

特にモチーフの一つ甲骨文字はBC1500年頃の古代アニミズムによる出現ですが、その底を滔々として流れているものは、何時の世も変わらぬ人間の『生』にたいする「美学」だと信じています。古代から今日まで『書や文字』はいろいろな機能を持たされたにせよ悠久の人類の歴史を一番目立たぬ所で支えてきた事実を見るにつけ只々驚愕の一語です。これら古代文字は私にとっての『想像と創造』の師であり、女神なのです。

東洋的な素材（筆・墨・紙）を駆使しての制作が主ですが、無論他の用具用材に就いても、また現代生活や空間（インテリア・エクステリア等）に馴染む作品づくりにも挑戦し、仕事を重ねて今日まで続けて来ることができました。（経歴参照）

古代文字によって生かされている自分を認識すればするほど、私はこれからの新しい時代の精神文化の構築に寄与したく精進し『人』としての仕事を続けなくてはなりません。



加藤光峰個展 上野の森美術館（1999年1月）



aaca会員  
彫刻家  
HITOSHI KITAMURA  
北村 壘  
神奈川県川崎市多摩区菅仙谷2-25-3  
TEL044-944-0724

## 色彩調和の方法として

私どもは日常生活の中でいろいろな色を使っています。ところで色を使うときに気になることは、どのような組合せの色を使えば調和するかということでしょう。色を使うときの目標はその調和ということです。そこで色を調和させるということがどういうことであるかについて述べたいと思います。


例えば、自分の家の居間のじゅうたんを買うときに、茶色のものを選んだとする。この場合、なぜ茶色を選んだのか。それはこの色が自分の好きな色であったからです。そこまでは誰でもよく分ります。1つの色を選ぶことは簡単です。しかしそれではその次に、どういう色のカーテンを求めたならばその茶色のじゅうたんと調和するかということになるとちょっと分らない。ところで茶色のじゅうたんと調和するカーテンの色は感覚的に選べばよいではないかとも考えられます。

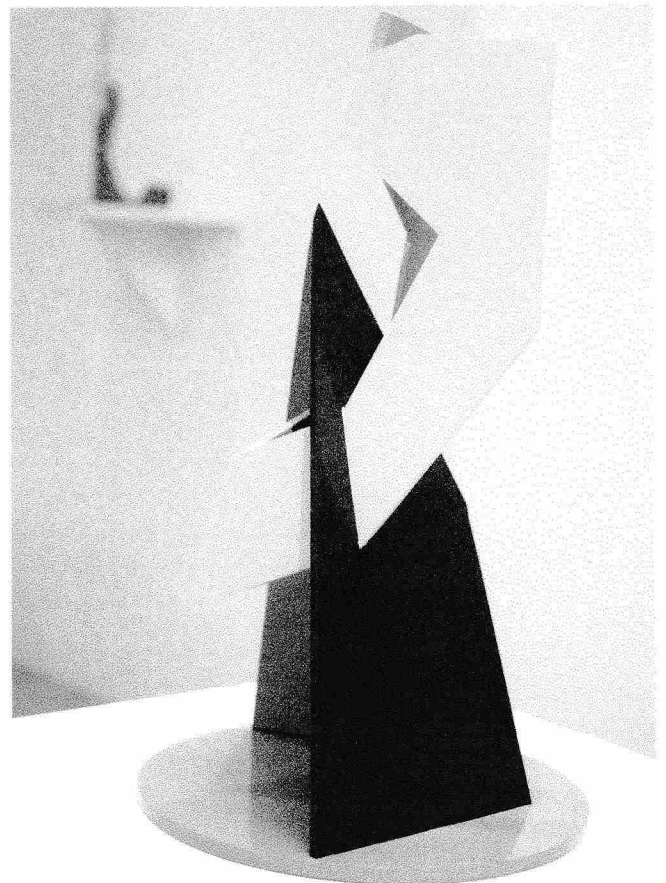
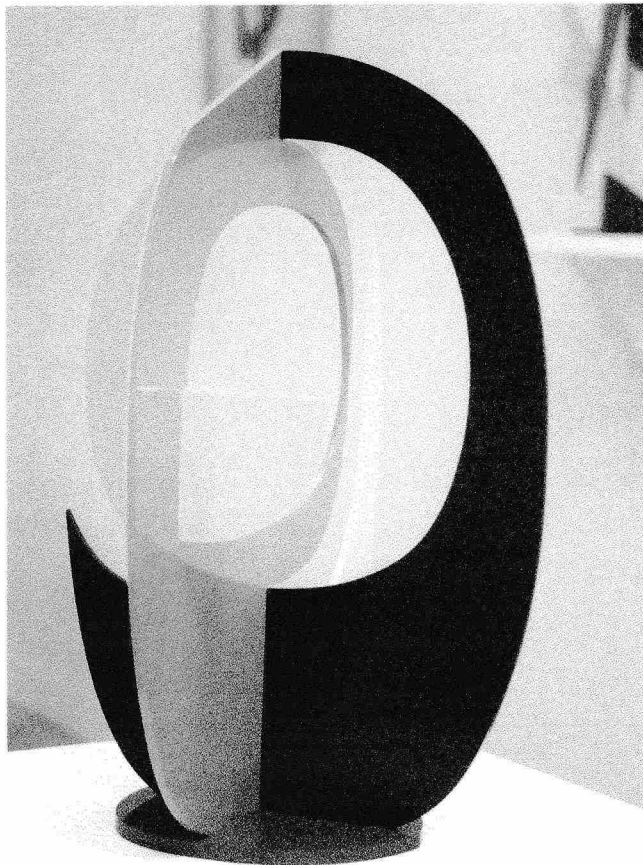
しかしこの、感覚的に選ぶというのは実際には難しいことなのです。

さてそれではじゅうたんの茶色と調和する色は何色でしょうか。実はそれは青色なのです。なぜそうなのか。茶色というのは橙色が変化した色ですが、橙と青は補色同士の色であると言われます。そしてこの補色ということが色彩の調和の原理になっているのです。補色とは何か。補色とは文字通り、相補う2つの色という意味です。即ち、それは1つの色のことではなく、2つの色の関係を示しています。1つの色があるとすると、その色だけでは完全ではなく、それを補うもう1つの相手の色がどうしても必要だということです。そしてこの補色同士の2つの色が最もよく調和するのです。補色の対とは次の6つの組合せです。

赤と青緑。橙と青（シアンブルー）。黄橙と藍（ウルトラマリン）。黄と青紫。黄緑と紫。緑と赤紫。

さて、補色の性質についてもう1つ重

要なことがあります。それは補色同士の2つの色を混ぜると灰色がかった色が生ずるということです。例えば、赤とその補色の青緑を混ぜるとき、2つの色の分量の増減によって純色から灰色まで段階的に灰色がかった美しい色調が現われます。これらの灰色がかった色を中間色と呼んでいます。またこの場合、白色は自由に混ぜることができます。白色の分量の多少によって明るさの度合いを加減するわけです。印象派の画家、セザンヌやピサロの絵はこのような中間色を巧みに用いたものでした。これに対して、モネやスーラは補色同士の2つの色を混ぜないで、純粋な状態で並列する方法をとりました。いろいろな補色の対を組合せることによって私どもは色彩の調和を思いのままに豊かに実現することができます。色彩の調和は補色の原理によって支えられているのです。 



oaca

**oaca**会員募集

協会では会員を募集しております。  
お知り合いの方をご推薦ください。  
詳細は事務局まで  
お問い合わせ 03-3457-7998